

文法をどこまで教えたらいのか

— 英文読解の指導を通じて —

三村 浩一

はじめに

学習指導要領で文法という科目がとっくの昔に姿を消したにもかかわらず、「文法準教科書」や「文法参考書」の需要は依然として根強い。そして、「文法参考書」は英語の実態や大学入試などを反映させた、「これだけは教えたい」というミニマムエッセンスであり、「学校文法」を具現化している。

私たちは「学校文法」をレファレンスとして、英文の文法的側面を授業で説明するが、その枠では説明が難しく思われる事例に遭遇することもある。その場合にどう対処すべきなのかについて、今私が使っている教材、Make Your Ascent to Better English Reading (5訂版)(数研出版)からいくつか例をあげて、私なりの意見を披露したいと思う。

過去完了

学校文法では過去完了形は「過去のある時までの継続・経験・完了や過去のある時よりも前に起こったこと」を表すと説明するが、次の文の過去完了はそれでは説明がつかない。

When humans bring an alien species into an ecosystem, that species may take over places that other species had occupied. (同書 p.8, 以下同様)

この過去完了の基準となる時が過去ではないことは明白である。これから先のことを言っている内容の文の中にあるのだから、これは困った。どう説明したらいいのか、説明せずにさりと流すのも一つの手であるかもしれないが、こだわり派の私としては、「時制の一致の未来版」のようなのだと説明をしたい。

つまり、take over の時に視点が移動したと考えて、これが疑似的な現在となる。すると、bring は一つ前の時制(=過去)となり、その過去の時点まで「占めていた」のだから、had occupied という過

去完了で表す。かなり苦しい説明だが、デクラーク(1994)の p.174~ p.177 を参考に考えたものだ。生徒はなんとなく理解したようであったが、

動名詞

動名詞と現在分詞は形が同じであるために、その判別が容易でない場合がある。次の文の disappearing はどちらだろうか。

Some scientists estimate that as many as 137 species disappear from the Earth each day, which adds up to 50,000 species disappearing every year. (p.8)

add up to は「合計で～となる」という意味だが、その意味で解釈すると、disappearing は species を修飾する現在分詞だと説明することになる。しかし、「合計で、毎年消滅している5万種になる」というのはしっくりこない。そこで、add up to の比喩的な意味である「結局～になる」で解釈すると、50,000 species を動名詞 disappearing の意味上の主語と捕らえることができ、which 以下を「その結果、毎年5万種の種が消滅していることになる」という自然な日本語に訳すことができる。

最上級

最上級は「最も～」という意味であると理解しているために、私たちは最上級の後に複数名詞が来ることを想定してない。かろうじて、〈one of the 最上級+複数名詞〉を説明する時に、最高のものが1つに限定できない場合があることに触れる。しかし、実際は、この形以外にも最上級のあとに複数名詞がよく登場する。

Even the most unimportant parts of our experience can be made special with the magic power that all parents possess in a child's eyes. (p.26)

最上級が「最高の部類の属する」複数のものを表すことがあることを私たちは念頭に置いておく必要があると思う。

比較に関しては、次のような名詞の程度を比較するような構文をよく目にするので、参考書で扱ってはどうかろう。

The good history teacher must be more of a poet than a scholar ... (p.40)

仮定法

仮定法の指導はむずかしい。そもそも、日本語に仮定法に相当するような表現がないことが、仮定法概念や意味を理解する大きな障害になる。そして、「仮定法過去」や「仮定法過去完了」などの形を覚えさせることに主眼を置くことになりがちである。

また、意味についても、例えば、仮定法過去は「現在の事実の反対や未来についての可能性の低い想像を表す」という説明にとどめる。これはSwan (2005)のTo talk about unreal or improbable situations now or in the future ... (p.258)と同じような説明で、間違っていないし、生徒にはこのレベルでいいと思う。

しかし、可能性というのはあくまで主観的なものであることは指摘しておいた方がいいだろう。次のような場合は起こりうる可能性が低いとは思われない。

But if you were asked what biotechnology is, what answer would you give? (p.42)

これは「議論のための仮定」とでも呼べるものであり、直説法と明確に境界線を引きにくい。これに関連して、〈If ~ were to ...〉が「If ~ should ... よりさらに実現の可能性がない場合に用いる」という風に説明されることがあるが、これは誤解を招く。次の例も「議論のための仮定」であり、客観的には可能性が低いわけではないが、議論の場からは心理的に離れているので、were toを使っているのであろう。

If foreign visitors were to bang on the table and hiss at the waiter for service in a New York restaurant, they would be fortunate if they were only thrown out. (p.16)

抽象名詞

名詞の可算不可算の問題は本当に悩ましい。英語

を外国語として学ぶ者にとっては「永遠の悩み」と言っても過言ではない。抽象名詞の扱いも不可算名詞に分類しておいて、普通名詞扱いをする特例を説明する。

しかし、現実には抽象名詞が可算名詞になる事例は「特例」ではすまないほど多いと思う。

If we lose any freedoms, it may be because we pay too much attention to the temporary needs of the present ... (p.40)

ここでは自由の様々な種類を念頭においているので、freedomを複数にしている。単数にすると、漠然とした自由の程度を述べることになるだろう。大西泰斗、ポール・マクベイ(1995)が簡潔に表現しているように、「まとまりがあるもの、具体性があるもの」が「可算名詞」となるという原則が抽象名詞にも適用されるということである。

したがって、抽象名詞のloveも可算化される。the BeatlesのAnd I Love Herの次の一節にあるloveも「私たちのような愛」という具体的なものだから可算になるわけである。

A love like ours could never die as long as I have you near me.

おわりに

文法の時間をもって文法を教えることは意味がないという意見も一部にあるが、私はそれに与しない。やはり、外国語としての英語である以上、体系的に文法を教えることは必要である。

文法をいかにわかりやすく教えるか、教えていることが実態とずれていないか、英文を読む際に有益な文法を教えているのか、など、日々自問を繰り返しながら、生徒と向き合い、そして、『ラーナーズ高校英語』などの執筆に携わっている。

参考文献

- Swan, Michael: *Practical English Usage 3rd Edition* (OUP, 2005)
 大西泰斗, ポール・マクベイ: 『ネイティブスピーカーの英文法』(研究社出版, 1995)
 デクラーク, レナート著, 安井稔訳: 『現代英文法総論』(開拓社, 1994)